

【2023年ベルリン国際映画祭 若手日本人監督海外プロモーション 参加レポート】

川和田恵真

この度、2023年度開催のベルリン映画祭・マーケットへの監督派遣に参加しました。

私は昨年、監督作「マイスマールランド」でジェネレーション部門に招待され参加していましたが、前回はコロナの感染が拡大していた中での開催でした。なので“通常開催”への参加は今回が初めてとなりました。違いとしては、昨年のコロナ対策のために施されていた規制が今年はずべて取り払われていたことです。昨年は、必ずワクチン接種証明や陰性証明を見せなければ映画祭会場や飲食店に出入りは出来ませんでしたし、劇場の観客数が半分となっていて、私の作品のワールドプレミア上映もチケットは完売でも客席は半分しか埋められない状態でした。だから、いつか満杯の劇場を見ようと誓って日本に帰国したのです。今回若手監督海外プロモーションに参加させて頂けたことで、そんな思い入れのある場に二年連続で来られたことをとても幸運に思います。

ヨーロッパフィルムマーケットへの参加は、今回が初めてでした。会場はマルティン・グロピウス・バウというところで、普段から企画展などが行われているという19世紀に建てられた古く趣のある建造物です。映画祭のメイン会場 Berlinale Palast から徒歩10分ほどのところに位置しています。中には所狭しに各国の映画配給会社のブースや、スペイン、韓国、台湾、など国自体のブースも設けられており、場内は座る場所を見つけることが難しいほど人が溢れていて、世界中からたくさんの人が訪れ、それぞれのブースでミーティングを行っていました。そのひとつとして、日本の文化庁のブースが設けられていて、一角のスペースを借りて私たちはミーティングを行いました。

今回の私たちのメインの目的は、自分と次作についてのプロモーション活動です。2/16～2/21の滞在期間中、全部で15名ほどの方にお会いして、それぞれがピッチをしました。一人5分ほど（通訳含め）で、自己紹介と次に扱おうとしている題材について話し、その場で相手を感じられた率直なリアクションを聞くことが中心になっていきました。

ピッチで受け取ったリアクションについて少しここに記したいと思います。

私の企画も他の二人の企画もこれから開発が始まるものなので内容を詳しく書くことは避けますが、特に日本特有の要素（海外には存在しないもの）が良いリアクションを得ているように思いました。もしくは作り方そのもの、例えば「ワークショップを行い実験的な映画づくりを行う」ということなども興味を持たれていたと思います。それは事前に二度のオンライン講習をしてくださったフランスのプロデューサー・ロナンさんから教えていただいていたそれぞれの企画のストロングポイントと重なっていたと思います。事前にポイントを理解できていたからこそ意識して相手に伝えることが出来たと思います。

私の次の企画は前作に続いて国籍にまつわるものを構想しており、日本特有でありながらもワールドワイドな要素も含んでいます。多くの方のリアクションから、国境を越えて伝わる内容である手応えは感じました。共同制作を薦めてくださり、アジアのプロデューサーを紹介すると言ってくれた方もいたの

で、今後の進捗次第でご相談するかも知れません。

移民や難民については世界の人に関心を持っているからこそコンペティティブな内容であるという指摘もありました。作品独自の強さ（キャラクター、表現、描写）を持たなければ、埋もれてしまうと。今回の企画は開発途中ではありますが、まだまだ弱い部分であることも痛感しました。

ワークショップで来ていただいたプロデューサーの方から、参加監督それぞれに本質的なこと（「あなたはなぜ映画監督になるのか？」「なぜその題材なのか？」「なぜ今この映画を作らなければならないのか？」）を問う質問をいただき、今回のために用意していた言葉だけではなくて、映画監督としての作品への向き合い方を改めて考える、特に重要な時間になったと感じています。私の企画に対しても、日本の発想だけでは出てこない角度の質問もいただくことができたと感じています。今回受け取った言葉は、これからの企画開発のなかでも自分の胸に問い続けながら進めていきたいです。

また、交流会として私たち3名をご紹介いただく朝食会を行っていただきました。ここではピッチはなく、コーヒー、ジュース、パンを片手に、リラックスして各国の映画祭の関係者やセールスの方とお話することが出来ました。韓国や台湾もそれぞれの国が作品や参加者をプロモーションするパーティを行っていて、映画祭と同時にそれぞれの国が自国の映画文化のために力を尽くしていることも今回初めて知り、とても刺激を受けました。

日本映画の海外展開に関しては、ドイツの日本映画祭を行われている方が「普段、ドイツで日本の実写映画を見られる機会がほとんどない」と仰っていたことが心に残っています。

今回ヨーロッパのセールス会社の3名の方お会いしましたが、そのうち2名はインディペンデント作品を扱っており、一年に扱う本数は10本ほどだと仰っていました。かなり多くの作品の脚本が寄せられ厳しい目で選抜しているとのことで、その狭き門に日本作品が入っていくことの難しさは想像がつかます。それでもその門を叩かないことには扉が開くことはありません。

国際共同制作に対する意欲は今回の派遣への参加前後で変わらず強く持っています。私自身は前作でもフランスと共同制作を行っていて、約二ヶ月間パリで仕上げを行いました。海外の新鮮な視点に触れることで作品が強化される面白さとともに、言葉が通じないことや制作過程の違い故の難しさも感じていました。苦楽ともにありますが、越境してコラボレーションする映画作りに挑戦したい気持ちは変わりません。英語を喋るために努力することや、相手に求めるものを伝えるぶれない言葉を得ることなど、自分を成長させていかなければ通用しないことは今回のピッチでも改めて強く感じました。

今回は普段国内には会えない皆さんと出会い、関係を最初の一步となる「はじめまして」の機会をいただくことができました。出会った皆さんには、今後作品が進んだとき、脚本や作品を見ていただけるように、関係を継続して積み重ねていくことが大事だと感じています。これからも積極的にマーケットへの参加を考えていきたいと思いました。

一緒に参加された野原位さんと佐藤快磨さん、三人でご一緒できてとても楽しい時間を過ごしました。お二人の温かくて優しい人柄には大変救われました。どちらの企画もとても面白く今後の展開も楽しみです。今回のチャンスをくださった文化庁の皆様、すべてをサポートしてくださったユニジャパンの眞島さん、池田さん、筆坂さん、インターンの近藤さんに心から感謝申し上げます。そして、全ての通訳を

担当して下さった今井さんも本当にありがとうございました。

昨年参加した際に心に誓ったことを冒頭に書きましたが、今回の滞在中、思いがけずその夢も叶いました。空き時間に見に行くことができた、フォーラム部門・清原唯監督の「すべての夜を思いだす」です。ぎゅうぎゅうに詰まった劇場、作品を見るために駆けつけた人々の温かい拍手に胸がいっぱいになりました。作品もとても素敵でした。そして、私もいつか自分の作品であの光景を見るのだ、と新たに心に誓いました。

